

---

# リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～

ナナフシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカル銀魂〜魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀〜

### 【Nコード】

N2725Z

### 【作者名】

ナナフシ

### 【あらすじ】

赤夜叉さんの許可をもらって書きました。

赤夜叉さんの『銀魂×魔法少女リリカルなのは』〜魔法少女と銀髪の侍〜と黒龍さんの『リリカル銀魂ライダー〜異世界鎮魂歌〜』を参考に書いています。

天人によって侍は衰退の一途をたどっていた。

そんな中、己の侍魂を決して曲げぬ男が一人居た。その男の名は坂田銀時。この物語の主人公である。

銀時には相棒がいる。だが、人ではない。

銀龍と言う刀がある。

普段は姿を見せず、銀時が任意したとき、銀時がピンチの時に姿を現す。

銀龍はただの刀ではなく、喋る刀であった。

銀時は源外に呼ばれて工場に向かい、装置の実験体となった。

そして、飛ばされたのは『リリカルなのは』の世界だった！

銀時は魔法少女と出会い、事件に巻き込まれていく。

新八と神楽が無印編では出てきません。すみません……被らない様にしたらこうなりました。後、新八はロリコンアニメオタクにするつもりなので

僕が書いているもう一つの銀魂の二次小説『銀魂〜冷血の鬼姫の日常〜』のオリキャラ達が出てきます

第一訓：始まりは突然に（前書き）

ナナフシ「どうも！ナナフシです！」

銀時「こいつが書くなんてな」

ナナフシ「悪いか！後、黒龍さんに一言……銀龍の件ありがとう」「  
ざいます！」

銀時「考えてくれたもんな」

ナナフシ「もう俺マジで感謝感謝です！」

銀時「その内銀八先生をやるつもりだからよろしく！」

ナナフシ「それでは『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の  
刀』 始まります！」

## 第一訓：始まりは突然に

ここは江戸の歌舞伎町。ここに万事屋銀ちゃんと言う何でも屋がある。

中では銀髪で天然パーマの男、坂田銀時。この物語の主人公である。他には……て、あれ？居ないんですけど。

「ああ、新八はお通のライブ、神楽は定春の散歩だ  
え？マジで？」

「マジだ」

銀時は地の文と会話をしていた。  
プルル、プルル。

すると、電話が鳴った。

銀時が電話を見てダルそうに取る。

「ハアイ、万事屋でえす」

銀時が怠そうに言った。

『銀の字か？』

「んだ。じーさんじゃねえか」

電話の相手は江戸随一の機械師<sup>からくり</sup>、平賀源外からであった。

『依頼なんじゃが』

「何だよ」

銀時は訪ねた。

『新しい発明品を開発したから来てくれ』

「絶対ロクな発明品じゃねえだろ。それに実験体にされるのがオチだ。断る」

『そんな事言っただけなのか？』

「あ？」

『来ないなら今までのツケ今日までに耳揃えて払え』

銀時はそれを聞いて行かざるを得なかった。

「行くか……」

『主よ……ちゃんと払わなければならぬではないか』

「銀龍ぎんりゅうの言う通りです」

銀時は誰も無いのに、手に突然刀が現れてそれと話していた。

銀龍は白かった。柄から鞘まで白かった。鍔は白銀だった。

刀身は見せてないが、刀身も白銀である。

銀龍はまた姿を消した。

銀龍は普段は見えないのだ。銀時の任意、ピンチの時に姿を現す。

そのまま銀時は工場へ向かった。

\*

「おい、じーさん」

銀時が工場の中に声を掛けた。

「来たか銀の字」

工場の中から老人が一人出てきた。

平賀源外である。

「ん？銀の字。あいつ等はどうした？」

源外は新八と神楽が居ない事を聞いた。

「二人共野暮用」

銀時はそう言った。

「まあ、良い。中に入れ」

源外に言われて銀時は工場の中に入った。

「おお〜！」

中に入った銀時は驚きの声を上げた。

工場の中には大きな装置があった。

「おい、じーさん、何だよこいつア？」

「こいつはな瞬間移動装置だ」

「瞬間移動装置？」



「ジジイイイイ！また欠陥品作りやがってええええええ！」

『主！落ち着いてください！』

銀時が源外に向かって怒鳴って、銀龍が慰めている時だった。

バチツと言う音と共に装置の中から強い光が発した。だんだん光がおさまる。

源外が装置の扉を開けると銀時の姿はなかった。

「…厄介な事にならなきゃ良いんだが」

源外は一人になった工場で呟いた。

\*

「ん？」

銀時は目を覚ました。

上半身を起こして、周りを見回した。

どこかのコンクリートで出来た道で、周りはコンクリートで出来た壁がある。そして空は暗く、月が出ていた。

「どっ、どこ？」

銀時はそう呟いた。





第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり（前書き）

ナナフシ「次回から銀八先生コーナーを始めたいと思います！」

銀時「いきなりだな！」

ナナフシ「いや、今回リリカルなのはキャラ出るからさ」

銀時「それでつて……」

ナナフシ「今回は銀龍が使われる！」

銀時「ネタバレ！」

ミラクル「ナナフシはそう言う人だし……てか、何故ミラクル

（エイト）！」

ナナフシ「ミラクル」と神楽は前書きと後書きに出してるんだよ。

無印編出番ないから」

銀時「だってよ。神楽、ミラクル」

ミラクル「いや、銀さんまで！」

神楽「ミラクルの理由が知りたかったら、『銀魂』冷血の鬼姫の日常』の質問コーナー、もしくは霜月サヤの『妖と夜叉』を見る  
と理由がわかるネ」

ミラクル「僕は新八じゃあああああ！」

銀時・ナナフシ「『リリカル銀魂』魔法少女と銀髪の侍と白銀の

刀』始まるぜ！」

ミラクル「無視するなアアアアア！」

## 第二訓：主人公は厄介事に巻き込まれるのがお決まり

「だアアアアアア！ チクシヨー！！あのクソジジイのせいで何か良くわからねえ場所に飛ばされちまったじゃねえか！あのクソジジイ！！帰ったら絶対瞬間移動させてやるからなア！」

目が覚めた銀時は怒りを露わにしながら怒鳴っていた。

『主よ。落ち着いてくれ』

銀龍ぎんりゅうが銀時を慰める。

今怒鳴っていても仕方がないと言って銀時を慰めた。

『それに主よ。周りを見る限り江戸ではない事は確かだ』

銀龍の言葉を聞いて銀時は……。

「ああ！ちくしょう！イライラする！あの綺麗な星空までイライラする！あんなに綺麗なのにイイ！」

銀時は顔を上に向けて怒鳴る。

銀時がそう怒鳴っている時だった。

ドカーン！

「!?!」

爆発音らしきものが聞こえた。

『主！行ってみましょう！』

「言われなくてもわかってらア！」

銀時は腰に挿してある『洞爺湖』を握りしめながら轟音の方に向かった。

\*

銀時が聞いた轟音の発信源は動物病院であった。

そしてそこには栗色の髪をリボンでツインテールに結んだ美少女 -

・・・高町なのはがフェレットを抱えていた。  
そして驚く彼女の眼前には病院の壁に埋まって、黒い何かがい  
ている。

ブヨブヨと形を変えて少し気持ち悪さを覚える。

なのはは慌ててフェレットを抱えて逃げ出した。

なのはは学校帰りに酷い怪我をしたフェレットを拾い、動物病院で  
手当してもらった。

そして夜、頭の中に謎の声が聞こえて、気になったなのはは動物病  
院に来た。

そして今の状態になっているのだ。

私、高町なのははフェレットさんを抱えてあの、変な怪物から逃げ  
ています。

あの怪物にも驚いたけど、フェレットさんが喋った事にも正直驚い  
ています。

それに周りにも景色もおかしいし、正直頭の中はぐちゃぐちゃなの。

「あの、お礼は必ずします！ だから僕にあなたの力を……！」

「お礼とかそんな事言ってる場合じゃないでしょ」

フェレットさんがさっき私に力があるって言ったけど、正直私にそ  
んな力があるかは分からない。

全然今の状況は把握できないけど、あの怪物をどうにかする力が私  
にあるなら。

「ぐおおおおおおお！！」

私が逃げながらそう考えていると、怪物が雄たけびを上げて私に飛び掛ってきた。

「っ!!!」

私はもうダメだと思い思わず目を瞑ってしまった。

でも、いつまで経ってもくるはずの痛みがこない事を不思議に思った私はゆっくりと目を開けた。

「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

黒い服の上に白い和服を半分抜いた状態で着て、銀髪に木刀を持った男の人が立っていました。

なのはがピンチになったその時に銀時がなのはの前に立ち、木刀で怪物を抑えたのだ。

銀時はそのまま怪物をぶっ飛ばした。

「おいおい、トラブル遭遇とはついてねえな」

銀時はまたメンドーな事に首を突っ込んでしまったと思い、メンドくさそうに頭を搔く。

そして、後ろに居るのはに顔を向ける。

「っで、大丈夫かお前？」

「え！は、はい！ありがとうございます！」

なのはは俺を言っ頭を下げる。

「あの、ありがとうございます」

フェレットも頭を下げた。

「イタチが喋った！」

銀時はフェレットが喋った事に驚いていた。

「あの、フェレットなんですけど」

「イタチもフェレットも変わらねえだろ」

「いや、変わりますよ！」

銀時とフェレットが言い合いをしていると……。

「グオオオオオオ！」

銀時にぶっ飛ばされた怪物は怒っている様だった。

「改めて見ると気持ち悪いなコイツ」

銀時は怪物を見ていつもの様なダラけた口調で答えた。

まあ、この人、エイリアンとか、人に寄生する刀とかと戦ってますしね。

銀時は横目で怪物を見ながらなのはに話し掛ける。

「えつと、お前等名前は？」

「え？た……高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

なのはとユーノは戸惑いながらも自己紹介した。

「じゃあ、なのはとユーノ、お前等はそこに居るよ」

銀時は軽く手を振るうと怪物の元へ向かう。

「えっ！？ちよつと待ってください！危ないですよ！」

ユーノは必死に叫んで銀時を止めようとした。

ユーノは銀時が木刀で怪物を吹き飛ばしたのを見ていた。

だが、アレは『ジユエルシード』と言う『ロストロギア』思念体。

魔法も使えない銀時がどうにか出来る相手ではない。

銀時にも自分を抱きかかえているのは同様『リンカーコア』があり、しかもなのはより高い魔力量を有しているのがわかる。

だが、なのは同様魔法の力に目覚めていない事をわかっている。

銀時は魔法なしの肉弾戦戦わなければならない。

それは無謀と言いようがない。

だが、ユーノは後々驚かされる。

ズバババババ！

銀時はユーノの予想を遙かに上回っていた。

銀時が思念体に近づいた時襲ってきたが、銀時は凄まじいスピードで木刀を振り、思念体をバラバラにした。

「す……すごい！」

「なんて強さだ」

なのはとユーノは銀時の強さに驚いていた。

バラバラになった怪物の破片は飛び散り、壁や電柱を破壊する。

なのはは銀時の剣の強さに見惚れていた。自分の家族も剣の腕はかなりの物だが、銀時の剣技はそれ以上の物を感じた。

「はい、終了オ」

銀時は思念体を倒したと思い、腰に木刀を挿し、なのはとユーノの所に戻る。

だが、思念体の欠片はじよじよに集まっていき、さっきの丸いブヨブヨの怪物に戻った。

「グオオオオオオオ！」

怪物は雄叫びを上げて銀時に襲いかかる。

「危ない！」

なのはが叫び声を上げ、銀時は後ろを振り向く。油断していた事もあり、銀時は木刀の刀身で防ごうとした。

『我が主よ……油断してはダメではないか』

銀龍がそう言っ姿を現して、銀時に銀色のオーラを纏う。よく見るとこれは魔力である。

その纏ったオーラはシルバー・オフ・アーマー白銀の鎧と言う。

オーラそのものがバリアジャケットの強度を持ち、AAランクの攻撃を喰らっても平気になる。

更にはそれを纏っている時の銀時は身体能力が上がる。

何とかそれで怪物からの攻撃を防いだ。

そのままシルバー・オフ・アーマー白銀の鎧は消えた。

ユーノはシルバー・オフ・アーマー白銀の鎧に驚いていた。

（い、今のは魔力で出来ていた！何であの人が魔力を使えるんだ！？）

ユーノはそれだけではなく、銀龍にも驚いた。

（そ、それに刀が喋ってる！）

ユーノはデバイスかと思ったが、デバイスではない事は確かである。そしてなのはは……。

「か……刀が喋ってる！」

銀龍に驚いていた。

それと同時に白銀シルバー・オブ・アーマーの鎧の綺麗さに見惚れていた。

「あ？こいつか？不思議だよな……喋ってたから……」

銀時も始めての時は驚いていたらしい。

でも今では慣れている。

銀時は怪物に目を戻した。

「ぐおおおお！」

まだ動いている。

鞘から銀龍を抜いた。

そして銀時は銀龍を振り上げた。

「オラア！」

そして振り下ろした。

すると銀色の斬撃が放たれた。

それも魔力で出来ていた。

これを魔力操作マジックコントロールと言う。

銀時の戦闘スタイルに合わせた魔法攻撃が出来る様になる。

つまり、自分の考えた魔力攻撃が可能になる。

(魔力の斬撃まで……一体何者なんだこの人！？)

ユーノは驚きの連発であった。

そして斬撃が怪物に直撃して真つ二つに斬れた。

だが、やはり元に戻ってしまう。

「ちっ、こいつ不死身か……」

『厄介ですね』

銀龍も色んな攻撃方法があるが全て無駄だと踏んだ。

「どうすれば良いの!？」

「いけない!あれを何とか『封印』しなければいけないんだ!」

「その封印ってどうすれば良いの?」



なのはとユーノが封印の事について話しているのに気付き、銀時は銀龍でバラバラに斬つたり、魔力攻撃を行つたりして時間を稼いだ。「さつき言つた事は覚えてる？」

「魔法の事？」

「そう、それを使うにはさつき渡した宝石が必要なんだ」

「これの事？」

なのははさつきユーノから貰つた赤い綺麗な宝石を見せた。

「それで、それを手に、目を閉じ……心を澄ませて……僕の言つた通りに繰り返して……」

なのはは目を閉じてユーノが言つた言葉を繰り返す。

「我……使命を受けし者なり……」

「我……使命を受けし者なり……」

「『契約の元、その力を解き放て』」

「『えと、契約の元その力を解き放て』」

「『風は天に…星は空に……』」

「『風は天に…星は空に……』」

「『そして、不屈の心は……』」

「『そして、不屈の心は……』」

『『『この胸に！！』』』

なのはとユーノの声が重なる。

『『この手に魔法を……レイジングハート！セーットアップ！』』』  
するとなのはの体が光に包まれていく。

<Stand by ready, set up!>  
「うわっ！眩し！」

あまりの光に銀時が目を細める。

光が収まると白いバリアジャケットを着ており、手にレイジングハートを持って浮かんでいるのが居た。銀時はその姿を見て啞然した。

「僕らの魔法は発導体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです！！そしてあれは……忌まわしい力の元に生み出されてしまった思念体。あれを停止させられるにはその杖で封印して元の姿に戻さないといけないんです！！」

なのははレイジングハート見て聞く。

「よくわかんないけど……どうすれば良いの？」

「攻撃や防御みたいな基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力とする魔法には呪文が必要なんです！」

「呪文？」

「心を澄まして……心の中にあなたの呪文が浮かぶはずですよ」

そう言われてなのはは目を閉る。そしてなのはは目を開ける、その目は真剣そのものだった。

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

杖を掲げながら呪文を紡ぐなのは、それを見ながらユーノは叫ぶ。

「ジュエルシード、封印！」

<Sealing Mode. Setup>

なのはの魔力系が敵を縛り上げ、怪物の額に『???』の文字が浮かび上がる。

<Stand by ready>

「リリカル、マジカル……ジュエルシード、シリアル????、封印

！」

その時銀時が、

「なに、あのセリフ!? 恥ずくない!」

『主よ……あの子も恥ずかしいのだぞ』

場の空気を壊すようなセリフを言った。銀龍はなのはも恥ずかしがつていると言った。なのは恥ずかしがつているのは本当だ。

レイジングハートの声に答え、なのはは何故かくるくる横回転しながら呪文を紡ぐ。

<sealing>

そして、なのはの魔力糸が怪物を貫き、宝石の状態に封印する。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて」

なのははフェレットの指示に従い、レイジングハートの先を近づけるとジュエルシードが宙に浮かび杖のコア（赤い宝石）に取り込んだ。それと同時に周りの景色が異空間のような不思議な景色から元の普通の景色に戻った。

そしてゆっくりと地面に降りる。

「ふう……」

なのははバリアジャケットを解き、安心して息を吐く。

そしてバタリとユーノが気を失って地面に倒れた。

「フェレットさん大丈夫!？」

なのはは気絶したユーノを抱きかかえて心配そうな顔をする。

さっきのユーノだって自己紹介したって言うに……。

「な、なあ」

「ふえっ!? な、なんですか?」

突然銀時に声を掛けられたなのはは驚いた顔で聞く。

「いや、ここにいると不味くね?」

「えっ?」

なのはは銀時に言われ、周りの景色を見る。道路や電柱は壊れたり没落したりなどかなり酷い状況だった。

更に、

ピーポーピーポーピーポー！

パトカーのサイレンの音が向こう側から響いてきた。

『主よ。このままだとどっからどうみても我等がやった様にしか見えぬぞ』

銀龍の言った言葉を聞いて銀時は……。

「に、逃げるオオオオオオ！」

「ご、ごめんなさー！ーい！」

銀時となのははその場からすぐ離れる為に全力疾走した。

『我は戻るか』

銀龍は呑気に言っただけ姿を消した。





### 第三訓：謎の組織にはご用心

銀時となのは、ユーノが走り去る所を見ていた人物が居た。

「ククク、面白い力じゃねえか」

それを見ていたのは、天然パーマの男で、背中には薙刀を背負っている。

「それにしても銀の兄貴もここに迷い込んだとはな」

男はそう呟いた。

「銀の兄貴と銀龍（銀龍）のコンビは相変わらずだなア……ククク」

男は楽しみに満ちた笑顔だった。

男がそうやってしていると……。

「雷雅（雷雅）ここ居たの」

後ろからロングヘアの女がやって来た。

男の名前は雷雅と言うらしい。

「おう、忍か」

雷雅は女の事を忍と呼んだ。

「探したのよ。アンタは私達『雷撃』のリーダーなんだからね」

忍は雷雅に向かってそう言った。

「わかってるよ。今さっき面白いもんを見ていたんでな」

「面白いもの？」

雷雅の言葉に忍は首を傾げて聞いた。

「銀の兄貴が来ている」

「『白夜叉』が！」

忍は雷雅の言った言葉に驚いていた。

「どうやら俺等と同じ様に迷い込んだのかもしれないな」

雷雅は不気味な笑みを浮かべながら言った。

「で、どうするの？」

「ちよっくら挨拶してくるわ。攘夷戦争で『迅雷』と恐れられたこ

の俺……疾風雷雅（疾風雷雅）がな」

雷雅はそう言うと言った姿を消した。  
実は凄く速いスピードで移動したのだ。  
「まったく……先に戻ってよ」  
忍も姿を消したのであった。

\*

銀時達三人はその後公園に居た。

『とりあえず自己紹介から始めるか』

「そうだな」

銀龍が言った事に頷いた三人。

銀龍も自己紹介と言う事で姿を現した。

「俺の名前は坂田銀時。頼まれれば何でもやる万事屋つてのをやってんだ。後、銀ちゃんでも銀さんでもテメエ等の好きな様に呼んでくれ」

『我は主の相棒である。銀龍だ』

「私は高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライアです」

それぞれ自己紹介を終わらせた後、銀時達はユーノから魔法の事を聞いた。

ユーノからそれを聞き終わった後、銀時も自分の事情を話した。

ユーノは銀時の話を聞いて『次元漂流者』だと言った。

「『次元漂流者』？」

銀時はもちろん、なのはもわからなかった。

「簡単に言えば迷子ですよ。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人の事です」

銀時はそれを聞いて、

「マジでか？」



確かに辺りを見回す限り江戸ではない。

それに天人さえもいなかった。

銀時はそれを信じるしかなかった。

「で、僕からも聞きたいんですが」

「何だ？」

ユーノは銀時に聞いた。

「その銀龍は一体なんなんですか？」

「あ、それは私も気になります」

ユーノとなのはは銀龍が気になる様だ。

「コイツか？……」

銀時は黙り込んだ。

そして……。

「何だろうな」

ズーン！

銀時が言った言葉に二人はズッコけた。

「何で持ち主であるあなたが知らないんですか！？」

「いや、俺もよく知らないんだよねエ。たまたま見つけて使ってる

？的な」

「いや、何ですかその理由！？」

銀時が言う事にユーノはツツコンでいた。

『主が我を見つけたのは幼少の頃だ。これ以上は言えん』

銀龍はそれだけを言った。

「まあ、わかりました。後一つだけ良いですか？」

『なんだ？』

「あなたはデバイスでもないのに何故魔法を使えるんですか？」

ユーノの言葉を聞いた銀時は……。

「え！？あれ魔法だったの！？」

「今まで知らなかったんですか！？」

銀時は攘夷戦争でも使っていたが魔法だとは思っていなかったらしい。

たぶん銀時は「不思議な能力が使える刀」とでも思っていたのだらう。

ユーノは銀時が魔法に気付いていなかった事に驚いた。

「いや、て言うか。俺の世界で魔法は架空の産物だから」

まさか自分が普通に魔法を使っていたとは思ってもよらなかった銀時だった。

そして視線を銀龍に戻す。

『我か……確かにデバイスとやらではない……我は目覚めた時には主に拾われていたのだ』

どうやら銀龍も何故銀時の魔力を解放する事が出来るのかわからならしい。

『我は何処で作られ、何処で何をしたか、何故この能力を持っており、使い方、名前しか覚えていないのかは謎なのだ』

つまりは記憶には能力と使い方、名前しか覚えていなかったらしい。

『だが、主は我が何者であろうと拾ってくれたのだ』

銀龍はそれ以来銀時と一緒に居る様だ。

「ま、コイツも自分自身がよくわからねえんだよ」

銀時がそう言くとユーノは「そうですか」と言っ引いた。

「でも、凄いですよね」

なのは目を輝かせながら銀龍を見ていた。  
すると……、

「楽しそうじゃねえか……俺も混ぜてくれよ」  
いきなり男の声が聞こえた。

その声が出た方向を見ると……雷雅が居た。

「雷雅！」

「よオ、銀の兄貴」

雷雅はニヤリと笑った。

ゾワッ。

なのはとユーノは恐怖を感じた。

雷雅の目は戦いたいと言う目だった。

「デメエ……何でこの世界にいやがる！」

銀時は敵意を剥き出しに言った。

なのはとユーノは敵意剥き出しの銀時にも驚いた。

「何……俺も銀の兄貴と似た理由でこの世界に来たんだよ」

雷雅は銀時にそう言った。

「デメエも！」

「ああ、俺達の組織のバカ機械師からくりのせいでこの世界に飛ばされたんだよ」

「俺達？と言う事は『雷撃』の奴らも！」

「ああ、居るさ」

雷雅は「ククク」と笑いながら言った。

「まあ、今回は挨拶に来ただけだ……今度会う時が楽しみだな……アハハハハ！」

雷雅は笑って去っていった。

「銀さん……あの誰ですか？」

「強者を求める戦闘狂野郎だよ」

銀時はそれだけを言った。

「でだ……その話は置いてこうぜ」

銀時はこれ以上聞かれないうちに言った。

「思えば銀さんって行く当てがないんですよね？」

「ん？ああそうだな」

銀時はなのはの言った言葉に頷いた。

「なら、家に来ませんか？」

「え？」

銀時はなのはの言葉に驚いた。

「助けて貰ったお礼もしたいですし。それに銀さんと銀龍さんともっとお話がしたいのでノノノ」

なのはは頬を赤らめながら言った。

銀時がなのはを助けた時、銀時が格好良く見えたのであろう。

「マジで良いのか？お前の家族が何て言うかわからないぞ」

『そうだぞ。主は大丈夫だが、見ず知らずの男を家に入れるのはどうかと思つぞ』

銀時と銀龍はそう答えた。

「大丈夫です。私を助けてくれた人つて説明すれば、お母さん達は銀さんを泊めるのを許してくれると思います」

「そうか？ならお言葉に甘えて」

銀時はそう言った後、「あ、後」と言った。

「その『ジュエルミート』集め俺も手伝うぜ」

「銀さん『ジュエルシード』だよ」

銀時の間違いをなのが訂正した。

「居候させて貰う代わりに手伝つてやるよ。俺は万事屋だからな」

銀時がそう言った。

「でも……」

ユ一ノは渋っていた。

「十歳を満たない女の子がそれを集めるのは危ないだろ。だから俺も手伝つてやるんだよ」

『我もその意見には賛成だな』

銀龍は銀時の意見に賛成した。

「わ、わかりました」

ユ一ノは銀時と銀龍との言い合いでは勝てないと思つたのだ。

銀時はこうしてなのはの家に居候する事になった。

『おまけ』

銀八「教えて」

生徒「銀八先生！」

銀八「ハアイ、それでは銀八先生コーナーを始めます。アシスタントは」

なのは「高町なのはです」

銀八「はい、その内魔王になる高町なのはがアシスタントだ」

なのは「なりません！」

銀八「早速質問行くけど、一つしか来てないんだよね」

なのは「そうなんですか？」

銀八「ああ、と言う訳で始めるぞペンネーム『月光閃火』さんから  
の質問

『ども…月光閃火げっこうせんかという。

しかし…タグにもあったが、また新八をそう扱うか…(黒)。(そう言いながら、黒いオーラを放ちつつ右掌から紫焰を立ち上らせる  
(汗)

輝刃「…閃火…とりあえず落ち着こう…(汗)。あ…さっそくだが  
質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・銀龍に質問…銀龍って話にもあった通り『喋る刀』だが、やはり人間の姿にもなれるのか？

あゝ…確かに、そういうタイプの武器って大概何かしらの人化設定はありそうだもんな…。次は俺からだ。

2. ナナフシさんに質問…というか忠告ね？タグにもあった通り、『新八はロリコン』なんてあったけど…あんまり酷い扱いはしないですよ？（黒笑み& a m p ;紫焰メラメラ（汗））

輝刃「…とりあえず、加減はしとけよ（汗）？俺も種族上言えた義理では無いが…（汗）。「…」」  
月光閃火の言葉に黙り込んでいた。

銀八「まずは一つ目だが」

銀龍『我か？我は人の姿になる事は無理なのだ』

銀八「だそうです。二つ目の質問の答えをナナフシ」

ナナフシ「き…気を付けないと…」

ナナフシはガクガクとなっていた。

銀八「と言う訳で『月光閃火』さん。あまり脅したらダメだぞ」

なのは「質問は以上です」

銀八「それではまた次回」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2725z/>

---

リリカル銀魂～魔法少女と銀髪の侍と白銀の刀～

2011年12月11日14時52分発行